# 第Ⅳ章　遺　　跡

## 1．遺跡の概観

1989年９月から1992年２月まで３年間に亘って行われた、百貨店建設用地及び奈良市都市計画道路予定地の調査区は、平城京西隆寺の四町の敷地であった左京一条二坊九・十・十五・十六坪の東半（九・十坪）から、寺地北東隅外側に亘って帯状に及んだ。

現在の秋篠川

現状では、近鉄西大寺駅から東に延びる通称一条通り（奈良生駒線）が、平城京一条々間路、すなわち旧寺地南限に相当し、旧寺地東外側を南北に秋篠川が流れるという関係にある。秋篠川は北西から斜行して京域に至り、京内では流路を改修されて、西一坊大路の一町西側を南北に貫く堀河の役割を担ったと考えられる。現状においても旧一条南大路以南、旧八条大路までほぼ直線的に流路が通っている。旧一条南大路以北は、やや西よりに斜めに蛇行しているが、これが奈良時代当初からの状況か否かは一つの問題であった。付近の発掘調査の結果で、このあたり一帯平城宮の西限近くまで、広く旧流路跡の堆積と推定される砂層が広がっているのを確認しており、古来、この川がかなりな蛇行と氾濫を繰り返してきたことがうかがわれる。

秋篠川の旧流路

後に述べるように、今回の調査で西隆寺々域北方においては、奈良時代から秋篠川の流路が寺域のすぐ近くまで及んでいたことが判明し、流路は旧一条大路以北は、現状と同様に、以南より西寄りに、すなわち西隆寺の寺地近くにあったと推定されるに至った。このことは、寺地北側に想定される一条北大路（北京極）、さらに北辺坊の様態にも問題をなげかけている。

秋篠川と寺地との間には二坊々間路が南北に通り、寺はこれに東門を開くことが旧調査で確認され、また南は一条々間路に南大門を開いていたと推定される。一条々間路は東へ延びてほどなく平城宮佐伯門に至り、また西は二坊大路をこえて西大寺の寺地へと導く。

遺跡は、以上のような周辺の状況下にあり、総じてほぼ平坦で、東南に向かってわずかに傾斜する。遺構面の標高は70.5m～71.5mである。遺構面は６世紀を中心とする古墳時代の遺物包含層を基本とし、東側では砂層を混じえ、部分的に西隆寺造営時の整地層を残す。縄文時代から平安

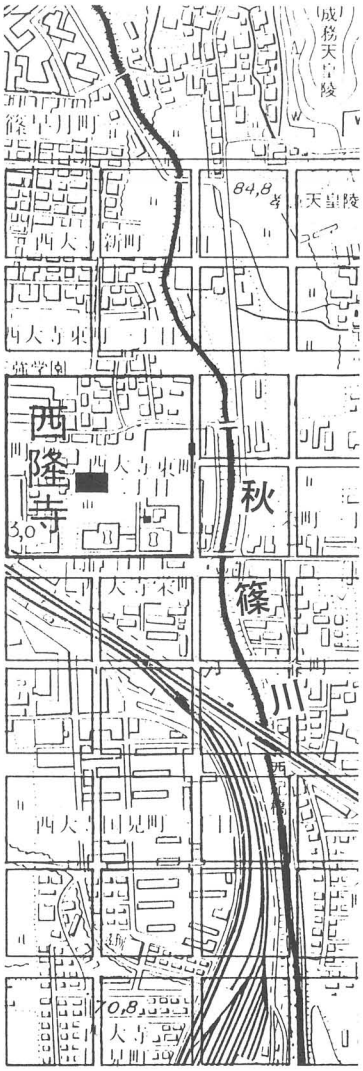


Fig. 12　西隆寺と現在の秋篠川流路

時代以降にまで及ぶ年代の遺構を多数検出したが、特に南寄りは概して削平が著しく、旧調査においても金堂跡は基壇地覆石の痕跡を、また塔跡は堀込地業をそれぞれ確認したに過ぎなかった。しかし東門には礎石を残しており、また今回新たに回廊と食堂を中心とした一画とを検出し、西隆寺の主要堂塔の大半を確認し、全体の伽藍配置が推定されるに至ったのである。

本報告書における以下の遺構の記述順序は、まず古墳時代の遺構を述べ、奈良時代以降の遺構を大きく回廊周辺と、食堂周辺とに分けて述べることとする。

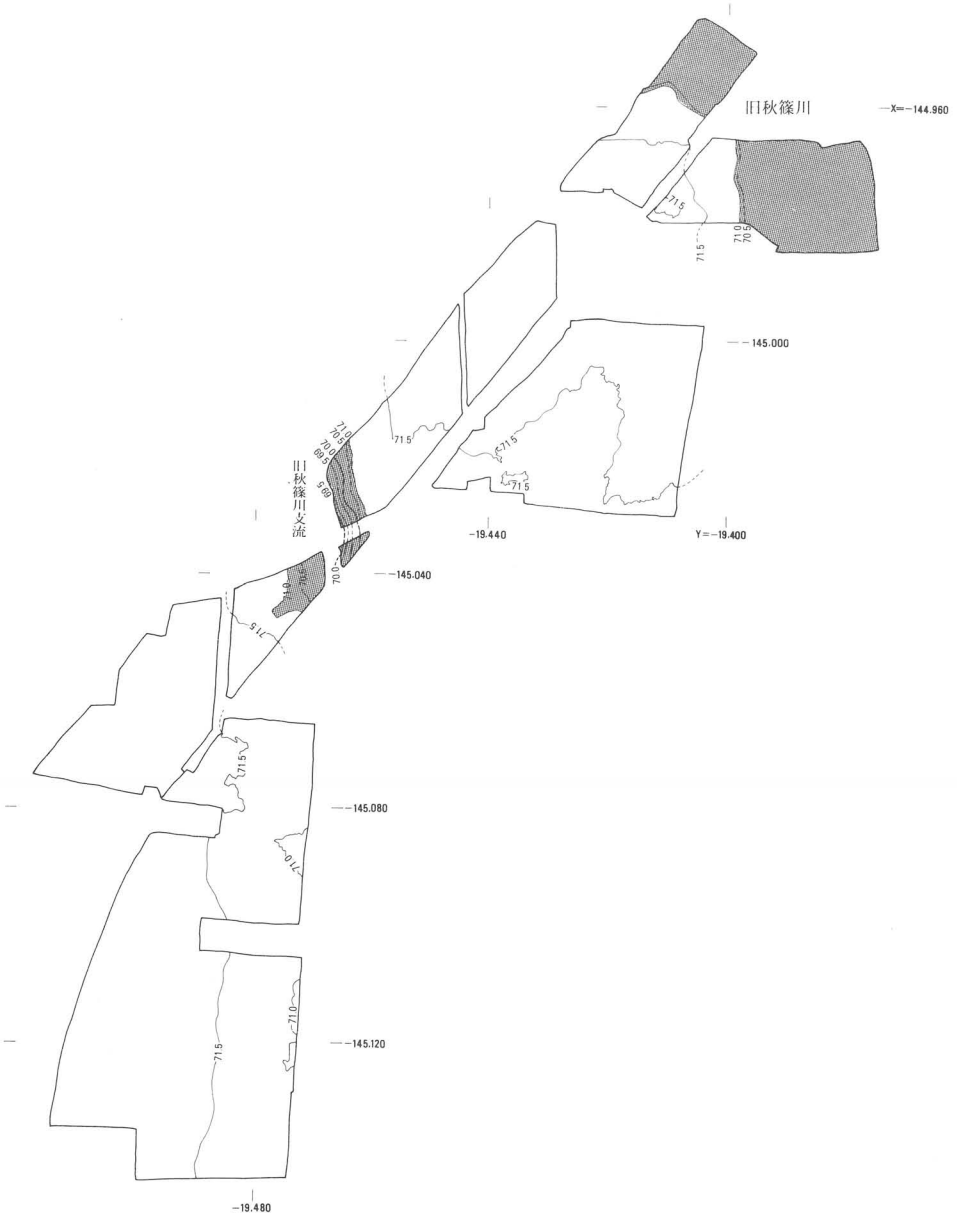



Fig. 13　調査区の地形と旧秋篠川流路

# 2　遺　　構

## A　古墳時代及び古墳時代以前

**SD340**（PLAN 2）

古墳時代の斜行溝で幅1.8m、深さ0.3mである。次に述べるSD350に対して直行方向に流れる。溝内に暗灰色の砂質土が堆積する。

**SD350**（PLAN2.3；PL.3）

古墳時代の斜行大溝で幅２～３m、深さ0.45mである。長さ45mにわたって確認し、回廊の内側部分のみ掘り下げた。溝内は暗灰色の粘土質と砂質土が互層に堆積し、６世紀の土器が出土した。水田にかかわる潅漑用水路であろう。

古墳時代の灌漑用水路

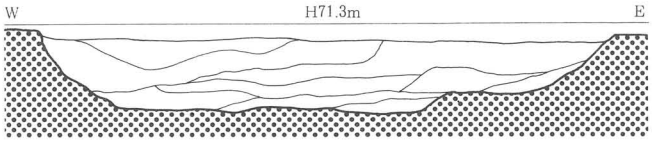



Fig. 14　ＳＤ350断面図

**SD384・385**（PLAN 3）

幅0.2～0.3m、深さ0.1mの古墳時代の斜行溝で、２本の細溝が0.4mの間隔を置いて平行し、斜行大溝SD350とは約12m離れている。細溝に挟まれた隆起部分は水田の畦畔の可能性があろう。

**SD412・413**（PLAN 3）

幅0.3m、深さ0.1mの古墳時代の斜行大溝で、二条の溝は交差している。SD412はSD350と約28m、SD385とは約20m離れる。SD413は、SD340と約27m離れる。

**SD440**（PLAN 5）

縄文時代の斜行溝。212次調査区の北辺にあり、北東から南西にかけてわずかに屈曲しながら、約20mに亘って検出した。221次調査区では一部を検出したに留まるが、さらに西に続くことが判明している。溝の断面は逆台形で、上幅1.7～２m、深さ約１m前後である。溝内は暗灰黒砂質土が堆積する。溝壁が急傾斜すること、溝底が平坦なことからみて、人為的に掘削した溝である可能性が高い。埋土の底近くから縄文時代晩期の船橋式土器、即ち突帯文土器の深鉢１個体が出土した。

縄文晩期の溝

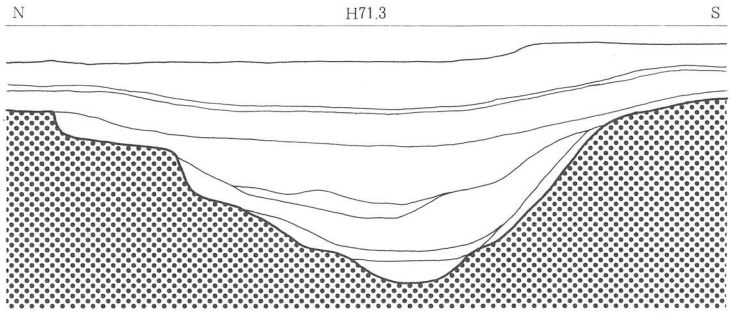



Fig. 15　ＳＤ440断面図

**SB441**（PLAN 5）

古墳時代の掘立柱建物で、棟筋は東から北に４°振れる。掘形は小さく、柱間寸法は1.2～1.5m前後で一定しない。

**SA442A・B**（PLAN 5 ；PL. 6）

古墳時代の掘立柱東西塀で、SB441の北側柱筋にほぼそろう。方位は東から北に2°振れ、SB441の振れとは2°異なるが、両者は一連のものだろう。2時期の建て替えが認められ、Aは三間、柱間2.5～2.7m、Bは四間、柱間2.4～2.5mである。

**SD493**（PLAN 6）

第219次調査区の南西から東北方向へ走る、幅3.2m、深さ0.4mの斜行大溝である。埋土に多量の土器を含む。土器の年代は6世紀が中心で、良好な資料がある。このSD493に平行する斜行細溝SD496や、これらに直行する斜行細溝SD494があり、これらも同時期のものであろう。また周辺の小穴群も、この時期に属する小規模な建物遺構となる可能性が高いが、分別は困難である。

**SD523**（PLAN 9）

幅0.3m、深さ0.35mの東西溝で、後述の池遺構SG530に流れ込む。溝幅に比べ溝の深さがより大きい。SB510の西側柱掘形と重複し、より古い。出土遺物から古墳時代のものと思われるが、性格は不明である。

**SD529**（PLAN 9・11；PL. 16・PL. 20）

**貯水池の下層にある古墳時代の溝**

後述するSG530の下層で検出した大規模な溝で、幅3m、深さ0.8mである。蛇行しており、人工的に開削されたものではなく、元々は秋篠川支流ないし分流のひとつであろう。灰褐色砂質土が堆積しており、古墳時代の須恵器・土師器のほか、石製紡錘車、メノウ製勾玉などが出土した。

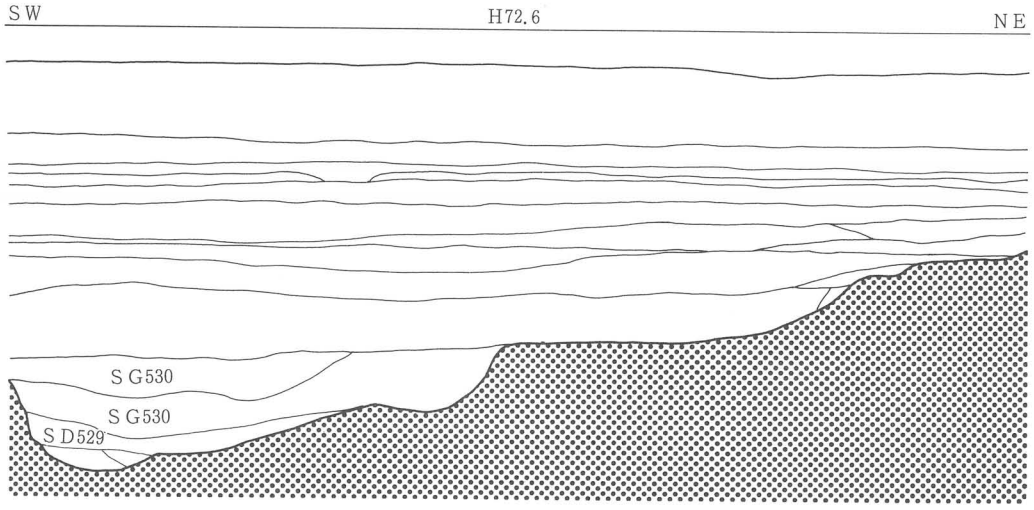



Fig. 16　SD529・SG530断面図

**SB536**（PLAN11）

古墳時代の掘立柱建物。桁行三間、梁行二間である。棟筋は北から東に37°傾き、柱間寸法は桁行2.2m二間分、1.4m一間分、梁行は1.75m等間である。径0.5～0.6mの掘形と径0.15mの柱痕跡をもつ。(Fig.17)

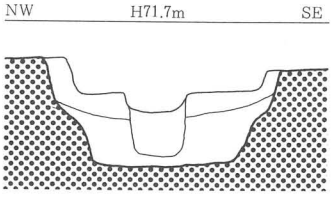



Fig. 17　SB536の柱掘形

**SB551**（PLAN 7）

一辺約6mの方形に巡る溝で、古墳時代の竪穴住居跡と推定した。

## B　回廊周辺

### 209次

**SC300**（PLAN 2・3 ；PL. 1 ・PL. 2）

西隆寺東面回廊。基壇土は削平されて残存せず、基壇の掘込地業も認められない。東面回廊は後述する北面回廊とくらべて、遺存状態は悪い。礎石該当位置で検出した１ｍ～1.2ｍの隅丸方形もしくは円形の柱穴は、遺存状態が良い部分で深さ10cm、悪い部分（南から六～八間目の間）では深さ0.1～0.4cmと薄く、色調や土質など下位の整地土層と類似しているため、厳密には礎石抜取り穴か礎石据付掘形かは判断がつかない。かりに、隅丸方形もしくは円形の穴をすべて礎石据付掘形とみると、桁行が南から八間目のみ８尺、他が10尺となる。しかし、回廊が途中で広くなる部分はありえても、狭くなることは通常考えられない。したがって、回廊は複廊で、柱間寸法は桁行10尺等間、梁行８尺であり、柱間の乱れる南から六～八間目の部分は、礎石抜取り穴などの痕跡であると判断した。北面回廊のとりつき部分まで21間分を検出した。西雨落溝はほぼ底面まで削平されていたが、雨落溝の化粧材を抜き取った後に投棄されたと考えられる瓦が、幅0.5～１ｍにわたり帯状に堆積していた（SD360）。堆積した瓦には完成品がなく、細かく割れたものが多い。

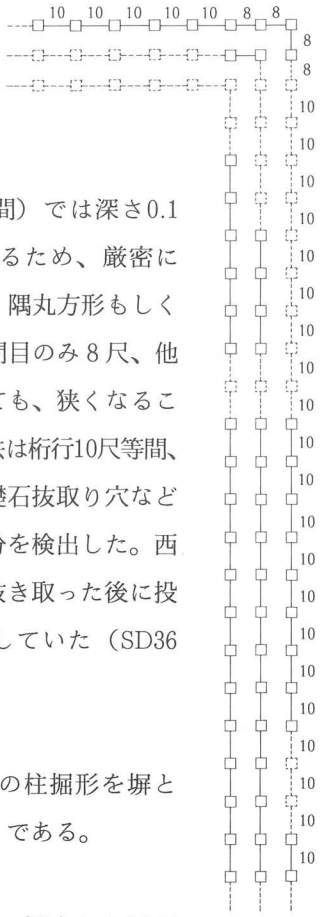


Fig. 18　ＳＣ300 模式図

**SA305**（PLAN 2）

発掘区東南隅に検出された、東西に並ぶ径0.5ｍ前後の三つの柱掘形を塀と推定した。柱間寸法は西が2.1ｍ（７尺）、東が1.35ｍ（4.5尺）である。

**SK314**（PLAN 2）

SA305の西の土壙で、南北2.2ｍ、東西1.5ｍの長円形である。埋土から瓦が出土。

**SB320**（PLAN 2）

東面回廊東側で検出された南北棟。桁行三間（総長4.5ｍ）、梁行二間（３ｍ）と推定したが、西半の柱掘形を検出しておらず、柱間寸法は定め難い。検出した柱掘形も大きさが不ぞろいで概して小さく、上質の建物ではない。

**SK325**（PLAN 2）

SB320の東北にある、東西4.5ｍ、南北4.5ｍの方形土壙。深さ0.15ｍで、東南部は南に張り出す。

**SB330**（PLAN 2）

発掘区北東で検出された南北棟建物の南端部分。柱間寸法は６尺等間である。212次調査区内には及んでおらず、桁行は三間と推定される。

---

1）模式図の記号　●柱根をとどめる掘形　◉柱痕跡をとどめる掘形　⊘抜取痕跡あり　○掘立柱掘形
……推定（すべて方位は上が北、縮尺約600分の１）　□は礎石跡

**SB352**（PLAN３）

発掘区西南隅で検出した掘立柱建物の東北部分。東西・南北各一間を検出した。柱間寸法は東西1.8m（６尺）、南北2.1m（７尺）である。

**SE353**（PLAN３）

SB352に重複する井戸。井戸枠は抜き取られている。径２m以上の規模を持ち、埋土部分を１m掘り下げたにとどまる。

**SD360**（PLAN２・３）

東面回廊SC300の西側の帯状の瓦堆積で、検出された回廊の北部を除いた全長に及ぶ。雨落溝の痕跡と推定される。

**SB365**（PLAN２）

東西棟建物の東妻部分。梁行二間で柱間寸法は1.5m（５尺）である。

**SB366**（PLAN２）

桁行三間、梁行二間、東西棟掘立柱建物。北東部は削平されており、柱掘形が失われている。残る掘形の一辺は0.4mと概して小さい。柱間寸法は1.8m（６尺）等間である。

**SE370**（PLAN２・３；PL.21）

**西隆寺造営直前の井戸**

SC300の西側で検出された井戸。井戸枠を残している。井戸枠は東西0.9m、南北0.8mの長方形で、四隅に柱を立て、横桟を通して、桟の外側に縦板を張る。埋土から土師器杯Ａ・甕、須恵器杯Ｂ・壺Ｌ・壺Ｑが出土した。この井戸廃絶後、その上位に瓦溜りが形成される。

**SB380**（PLAN３）

SB366の北方にある東西棟建物の東妻部分。梁行二間で柱間寸法は７尺等間である。

**SK388**（PLAN２・３）

SB395の東側で検出された不整形の土壙で、深さ0.2m。灯明皿として使用されたと推定される奈良時代末期の土師器をはじめ、完形の土器が大量に出土した。

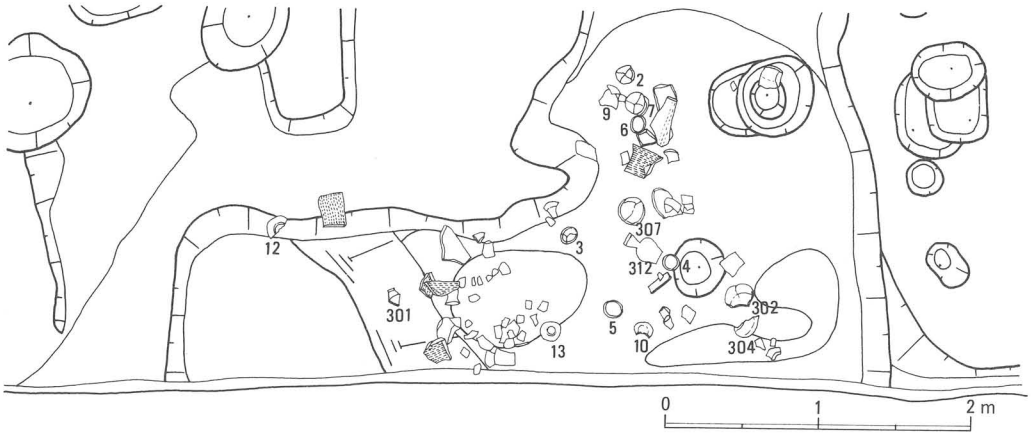



Fig. 19　ＳＫ388内出土土器分布図

**SB390**（PLAN２・３）

SK388の北側に重複する南北棟建物。桁行三間、梁行二間で、柱間は1.8m（６尺）等間である。柱掘形は不整形で、径0.3m前後と小さい。

**SB395**（PLAN３）

発掘区西端にある南北棟建物。桁行三間、梁行二間、柱間寸法は６尺等間である。柱掘形は

略方形で一辺0.6～0.7ｍと比較的大きく、径0.25ｍの柱痕跡を留めるものがある。西側柱の柱掘形は金堂下層にあたり、未検出である。柱掘形から須恵器杯Ｂが出土した。

**SA399**（PLAN２・３）

SB401に重複する東西塀で、五間分を検出した。西端の柱掘形は径0.8ｍ。柱間寸法は2.4ｍ（８尺）等間である。金堂部分の調査区には、西延長部が検出されておらず、金堂の下層となるものと思われる。

**SX400**（PLAN２・３；PL.２・４）

暗　　渠

SC300を東西に横断する暗渠。底石に挙大の偏平な川原石を並べ、側石に凝灰岩を立て、底面は東に向かって傾斜する。西側に川原石の底石と上面を揃えて凝灰岩を据える。底石の状況をみると、回廊西側柱から西へ1.2ｍの位置を境として、東では川原石がほぼ２列に並んでいるのに対して、西では３列に並んでおり、この境目が基壇端にあたると推定される。すなわち西側柱心からの基壇の出は４尺となる。また、暗渠西端が西雨落溝の西端と考えられ、この上に凝灰岩の雨落溝側石を立てたと推定される。同様に回廊基壇化粧も凝灰岩であった可能性が高い。回廊西側柱心から暗渠西端の凝灰岩の内側まで2.1ｍ（７尺）、基壇西端から西雨落溝西肩まで0.9ｍ（３尺）である。後者の部分が雨落溝もしくは犬走りとなろう。暗渠底石のレベルは、雨落溝抜取り跡の底面より深く、雨落溝と暗渠が交錯する部分では、暗渠を雨落溝より一段深くし、暗渠以北の排水を集めていたと推定される。

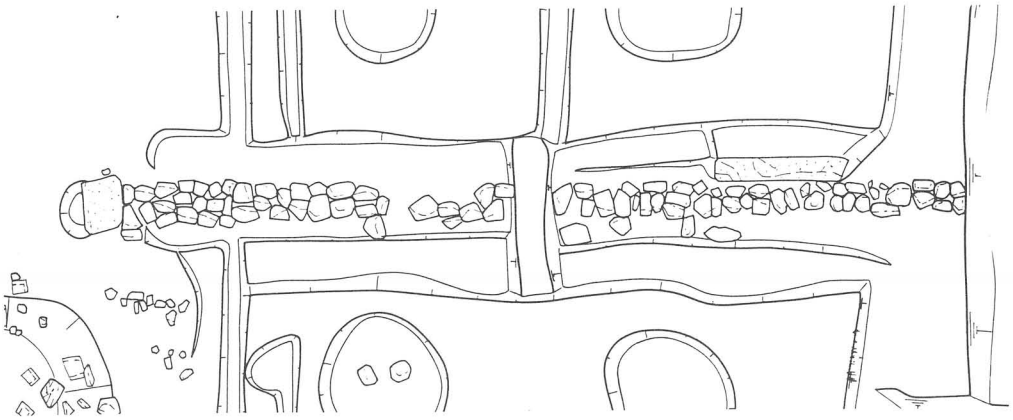


Fig. 20　ＳＸ400平面図　0　1　2ｍ

**SB401**（PLAN２・３）

SB390北方の南北棟建物。桁行三間、梁行二間と推定され、北妻はSK405に破壊されている。柱間寸法は、桁行が1.8ｍ（６尺）等間、梁行は1.95ｍ（6.5尺）とやや広い。

**SK405**（PLAN２・３）

SB401・410と重複する大土壙で、南北６ｍ、東西６ｍ以上の規模を有する。深さは0.3ｍあり、多量の瓦が出土した。

**SB410**（PLAN２・３）

SK405北の東西棟建物で、南側柱の掘形は、SK405の底面にかろうじて痕跡を残す。桁行二間以上で、以西は発掘区の西にのびる。柱間寸法は2.25ｍ（7.5尺）等間、梁行は二間、各1.8ｍ（６尺）である。

**SC450**（PLAN５・７；PL. ６）

回廊東北隅

本調査区では北面回廊 AC450と東面回廊 SC300のとりつき部分、即ち回廊東北隅を検出した。全体として遺構の残りは悪いが、礎石該当位置にある隅丸方形もしくは円形の穴は深さ約20㎝残り、210次調査の東面回廊より遺存状態はよく、土層の検討の結果、礎石据付掘形と判断した。隅二間分は、桁行・梁間とも８尺等間である。

**SD445**（PLAN２・５）

東面回廊の東雨落溝。奈良時代の遺構面が西南隅に部分的に残っており、南北５ｍほどを検出した。幅は0.7～１ｍである。回廊心から溝心まで約3.5ｍ（12尺）であり、回廊西側の状況とやや異なる。

**SE448**（PLAN５）

西隆寺造営以前の井戸

発掘区東端にある小型の井戸。削平されて浅く、横板組の井戸枠一段が残る。底に平瓦を円形に並べ、中に刳りものの桶を置き水溜とする。外側に使用していた平瓦は12枚残り、半截したものが多い。埋土から和銅開珎が２枚出土しており、開削は奈良時代前半にさかのぼる。

**SK449**（PLAN５・７）

回廊東北隅中央部分、即ち北面・東面回廊の棟通りの交点部分で検出された土器埋納遺構を SK449と呼ぶ。この部分の礎石据付掘形は、東西１ｍ、南北1.3ｍの長円形を呈し、深さ0.2ｍである。詳しくは、第Ⅴ章第５節で述べる。

**SD451**（PLAN５；PL. ７）

北面回廊東方の素堀りの東西溝。幅0.5ｍ、深さ0.2～0.3ｍ。東西16ｍ分検出した。西隆寺造営頃の SK455と重複しており、SD451の方が古い。右京一条二坊九・十坪の坪境小路心の想定線より北約15ｍに位置し、坪境小路に関連するものとみるには距離が離れすぎる。九坪内での区画溝であろう。

**SD452**（PLAN５；PL. ７）

素堀りの東西溝で、SD451の南約６ｍの位置にある。

**SK455**（PLAN５・７）

回廊北東隅に近い位置で検出された浅い土壙。平面は東西に長く、長辺2.3ｍの楕円形で、須恵器横瓶・壺などが出土した。いずれも内面に漆が付着する。SD452と重複し、より新しい。出土した土器は西隆寺造営時のものである。

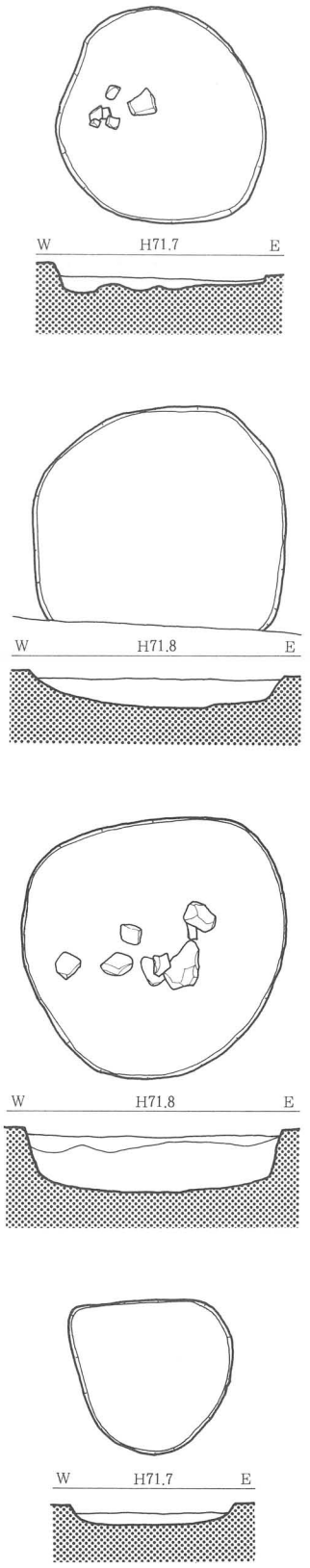



Fig. 21　ＳＣ450平面図・断面図

## 211次

**SC450**（PLAN５・７）

北面回廊。東面回廊取り付き部まで五間分を検出。柱間寸法は桁行10尺等間、梁行は８尺である。礎石据付掘形の形状は径1.5ｍ前後の不整円形もしくは長円形で、厚さ0.15～0.2ｍの埋土がレンズ状に残る。　北面回廊

**SB541**（PLAN７；PL.12）

掘立柱東西棟建物。桁行七間以上、梁行二間の掘立東西棟建物。柱間寸法は桁行2.1ｍ（７尺）等間、梁行2.4ｍ等間（８尺）。出土遺物から西隆寺に先立つ時期の建物である可能性も残すが、東西に長い形状から西隆寺造営に伴う仮設的な尼坊と推定する。柱掘形から平城宮土器編年Ⅲ以前の土師器杯底部、同抜取穴から平城宮Ⅲ・Ⅳ期の土師器杯Ａが出土。

**SB542**（PLAN７；PL.12）

桁行九間以上、梁行二間の南北棟建物。柱間寸法は桁行、梁行とも2.1ｍ（７尺）等間である。柱掘形は一辺１ｍ前後の隅丸方形。SB541を建て替えた、西隆寺尼坊と推定される。　尼坊

**SB543**（PLAN７）

東西二間南北二間の総柱建物。柱間寸法は東西方向５尺５寸、南北方向６尺５寸である。SB541と重複し、より新しい。

**SB544**（PLAN７）

掘立柱総柱建物。桁行三間、梁間二間。柱間寸法は桁行1.8ｍ（６尺）、梁行2.1ｍ（７尺）。柱穴掘形から９～10世紀の土師器杯が出土した。SB542と重複し、柱穴の重複はないが、遺物からより新しく、SB543と同時期と推定される。

**SB545**（PLAN７）

掘立柱建物の南妻部分。柱間寸法は2.1ｍ（７尺）等間である。SB542と柱間寸法が等しく、しかも南妻柱筋をそろえており、SB542と並列する西隆寺尼坊と推定した。

**SB546**（PLAN７・11）

東西棟掘立柱建物で、東端は223－21次調査区で検出された。桁行四間以上、柱間2.4ｍ（８尺）等間、梁行二間、各2.1ｍ（７尺）である。

**SA547**（PLAN７）

掘立柱東西塀。柱間寸法は2.65ｍ（９尺）等間、四間分を検出した。

**SE548**（PLAN７；PL.21）

調査区南部西端に位置する井戸。掘形の南北約２ｍ、井戸枠の

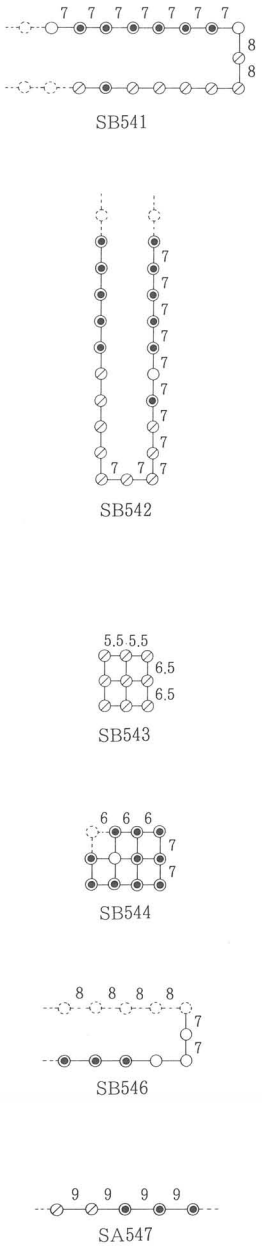



Fig. 22　ＳＢ541等模式図

講堂は9世紀初頭この場所に存在しない

横板を止めていたとみられる2本の杭の距離約0.9m。埋土からは、土師器ⅢA・須恵器杯B・緑釉陶器が出土した。平城宮土器Ⅶ（9世紀初頭）の段階で、この場所に井戸が存在していたことは明らかである。

**SK549**（PLAN 7）

調査区西南部の土壙。平面は径2m強の不整形で、埋土から平城宮軒瓦編年Ⅰ期の軒平瓦6664Gaが出土しており、西隆寺に先立つ時期の遺構と推定される。また、湧水が激しく掘り下げが十分できなかったが、井戸であった可能性も残る。

**SX550**（PLAN 5・7；PL.13）

北面回廊SC440北側の瓦溜りで、10ケ所あり、回廊廃絶に伴うものであろう。

## C　食堂周辺

### 210次

**SA420**（PLAN4・8；PL. 4）

東面築地

西隆寺々地の東を画す築地塀で、次に述べる西側雨落溝SD421と、東側部分との間に、幅1～1.2m、厚さ0.2mの基底部としての積土を残す。残存する積土は、西側雨落溝まで達するので、犬走り部分を考えると築地基壇土自体ではなく、築地基底部と考えるのが妥当である。

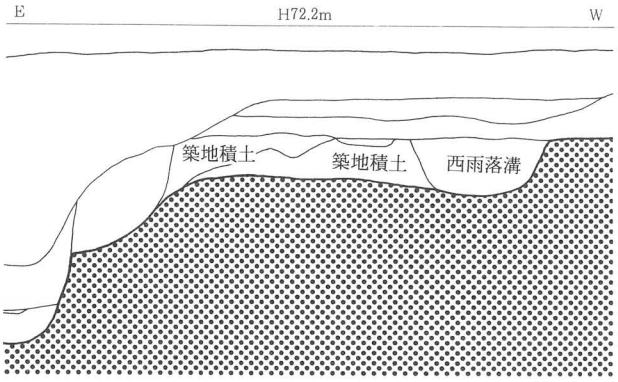


Fig. 23　ＳＡ420断面図

**SD421**（PLAN 4・8）

築地塀SA420の西側の雨落溝。幅約0.7m、深さ0.4m。溝底は南から北に向かって低くなる。後述する東西溝SD429に鍵の手状にとり付き、以北には延びない。大量の丸・平瓦が出土した。

**SA425**（PLAN 4・8）

219次調査で南端を検出している南北塀の一部。柱間寸法は2.4m（8尺）で、210次調査区内に北端の二間、219次調査区内に南端の三間を各々検出しており、総長十四間（33.15m）となる。SB426と重複し、より古い。

**SB426**（PLAN 4・8）

SA425と重複する建物の北東隅部分で、東西方向に一間分を検出した。柱間寸法はいずれも3.0m（10尺）である。

**SB428**（PLAN 4・8）

建物の南東隅部分で、東西・南北にそれぞれ一間分ずつを検出した。方位は方眼方位から著しく振れる。柱間寸法は東西2.4m（8尺）、南北2.1m（7尺）であり、掘形の径は約0.6m、径0.15mの柱跡を留める。方位の振れ及び検出状況から判断して奈良時代以前の可能性がある。

**SD429**（PLAN４・８）

西隆寺敷地内の北端を東西に流れる溝で、東面築地下を石組の暗渠（SX430）としてくぐり、寺域外への排水を行う。築地とりつき部分は何度も冠水したものとみえ、溝の肩がやや広がる。溝底はSD421よりも約0.5ｍ程低い。総長17ｍを検出したが、西にゆくほど広くなる。227次調査区西端では３ｍ以上に広がって断面はＵ字形となり、埋土は上下二層に分かれる。軒丸瓦6225A、軒平瓦6663Cb、6721Hbを含む多量の瓦片および奈良時代後半の土器が出土した。

**SX430**（PLAN４・８；PL.４）

東面築地下の石組暗渠

SD429に連なる暗渠。暗渠部分は西側の入口のみに石組と底石が残る。底石と側石は自然石で、蓋に凝灰岩の切石を使っている。自然石の側石は、溝底面よりやや上位の土の上にのっており、後世の修復の可能性がある。暗渠入口に当たる、南北に据えられた２個の凝灰岩切石は、幅0.2ｍ、長さは合わせて0.9ｍあり、暗渠の外法寸法に対応するものと考えられる。暗渠上面のレベルは、東面築地の西雨落溝SD421北端の溝底より0.1ｍ低く、SD421が北流し、暗渠によって東へ排水することがわかる。

**SD431**（PLAN４・８）

秋篠川旧流路にあたり、西隆寺廃絶後、寺地ぎわまで大きく氾濫した状況がうかがわれる。

## 219次

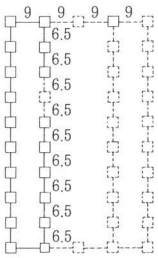
**SA425**（PLAN６；PL.11）

210次調査で北端を検出している南北塀の一部。柱間寸法は2.4ｍ（８尺）である。柱穴平面は一辺0.9ｍ（３尺）の正方形である。柱穴から遺物の出土はなく、時期は不明。

**SB480**（PLAN６；PL.９）

南北棟礎石建物

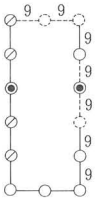
南北棟礎石建物。西側柱・入側柱の礎石据付穴ないし抜取り痕跡九間分と、東入側柱の礎石据付穴一つを検出した。桁行は九間以上となり、柱間寸法は1.9ｍ等間で尺の完数値にはならず、６尺５寸と推定し得るほか、ある距離を等分した結果とも考えられる。梁行は2.7ｍ（９尺）等間である。遺構は形状、深さ共に一定せず、礎石据付掘形と抜取り穴を混合して検出したものと考えられる。北妻柱の遺構は検出されておらず、また以北は旧流路の砂層にあたり検出が困難であったこともあって、北により長く延びていた可能性もあり得るが、北に接した東西溝SD484は、後述するようにこの建物の北雨落溝の可能性が高い。



SB480

**SD484**（PLAN６）

SB480北側の東西溝。調査区の東端から西へ７ｍに亘って検出し、幅0.6ｍ、深さ５㎝で、瓦辺を多く含む。SB480の柱筋から1.5ｍをへだてて並行しており、その北雨落溝であろう。



SB485

**SB485**（PLAN６）

南北棟掘立柱建物で、桁行五間、2.65ｍ（９尺）等間。梁行も2.65ｍ（９尺）二間である。柱掘形は一辺１～1.2ｍのやや南北に長い長方形を呈し、深さは遺構検出面から0.35～0.5㎝である。柱痕跡は直

Fig.24　ＳＢ480等模式図

径25㎝前後あり、東側柱はSB480と多く重複し、SB485が古い。柱筋は北で西に振れる。

**SD486**（PLAN 6）

SB480の西雨落溝。SB4809西側筋から溝心まで1.0m。幅0.6m、長さ10mにわたり、多量の瓦片を含む。SB480に葺かれた瓦が落下して、堆積したものであろう。

**SB490A・B**（PLAN 6 ；PL. 10・11）

食　　堂

調査区南端の東西棟建物で、桁行七間、北側および北入側柱を検出した。当初掘立柱の建物（A）を、同規模、同位置に礎石建物（B）に改めている。桁行の柱間は2.95m（10尺）等間、廂の出も10尺である。身舎妻柱は東側のみを検出したが、柱穴は他に比してきわめて浅い。当初の柱掘形は一辺0.9～1.2mの略方形で、柱痕跡は径30㎝。柱を抜き取った跡に根石を置き、礎石を据えている。本建物跡は西隆寺食堂に比定される。

**SE491A・B**（PLAN 6 ；PL.21）

扉板の転用材をもつ井　戸

当初横板の、いわゆるせいろ組と呼ばれる上質の構造の井戸（A）を、後に内側に縦板を添え立てて改修している（B）。掘形は一辺3.6m前後の隅丸方形。深さは検出面から2.4mである。Bに用いられた板材は、四面とも扉板の転用であることが判明し、西隆寺の建築の様相の一端をうかがうに足る貴重な資料となった。若干の木製品および延喜通宝の他に、埋土から多量の土器類が出土した。9世紀後半代の緑釉陶器片を含む。抜取り穴と井戸底の土器類はほぼ同時期のもので、年代は延喜通宝の年代よりもさらに新しい。

**SE492**（PLAN 6）

219次・228次発掘区の中間に位置する井戸で、掘形は一辺約3mの方形。掘形内の埋土は硬質の粘土で、強固に作られている。井戸枠は横板組で一辺1.2mの方形に組むが、保存状態が悪く、詳しい構造は不明。現地表面から3.3mのところまで掘り進んだが、底には至らず、崩壊の危機があったためそれ以上の発掘は中止した。深さ2.3mの抜き取り穴があり、平瓦・丸瓦が多く投げ込まれていた。埋土出土の土器より西隆寺造営時には埋まっていたと考えられる。

**SB495**（PLAN 6・10；PL. 9）

東西棟掘立柱建物で、桁行五間、2.65m（9尺）等間、梁行2.65m（9尺）二間であり、柱筋は方眼方位より北で西へ2°弱振れる。柱掘形は一辺約1mの略方形を呈し、深さは0.6m前後である。いずれの柱穴にも明瞭な抜取り穴が認められ、その中に黄色土が混入しているのが、方位と共にSB485と共通する特徴である。

**SA501**（PLAN 6）

後述するSB500の東に接する位置にある南北塀で、柱筋方位は北で西に振れる。発掘地区内では二間分を検出し、さらに北に延びてSA506にとりつくと推定される。柱間は2.7m（9尺）等間である。

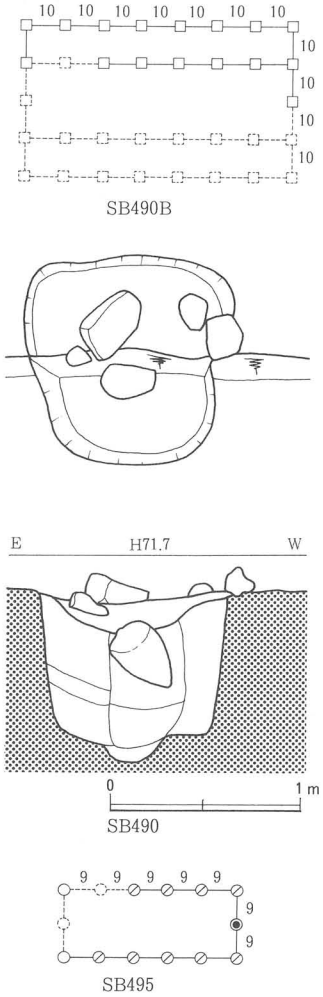



Fig. 25　ＳＢ490等模式図・断面図

## 228次

**SB500**（PLAN 6 ・10 ; PL.11・17・18）

桁行七間、東西棟南北二面廂付きの掘立柱建物である。柱間は、桁行・梁行共に2.65m（9尺）等間である。このSB500には、建物前方に中央三間と柱筋をそろえた四つの柱穴があり、これらを階隠と推定した。側柱との距離は3.9m（13尺）である。柱間10尺のSB490とは梁行の柱筋が一致しないが、建物東西中軸線が一致する関係にある。両者の方位が等しく、また、妻柱間の距離が26.7m（90尺）となることには計画性が認められ、同時期と推定される。

**SB504**（PLAN 6 ・10）

SB500・505に重複する東西棟建物。桁行三間、総長4.5m。梁行は二間で、2.6mである。尺による計画性が認められず、柱穴の重複はないが、西隆寺よりも新しい時期のものと推定した。

**SB505**（PLAN10 ; PL.17・18）

東西棟建物で、西妻から桁行六間分を検出し、周囲の遺構との関係から桁行七間と推定される。廂を持たず、桁行は2.1m（7尺）、梁行は2.4m（8尺）等間である。SB500と重複してより古く、柱筋は北で西に振れる。

**SA506**（PLAN10 ; PL.18）

東西塀、柱間は3.0m（10尺）等間。四間分を検出した。SB500と同様の振れを持ち、東に延びてSA501に連なり、SB500の後方を画すると推定される。

**SB507**（PLAN10）

東西棟建物で、桁行三間分を検出し、桁行五間、梁行二間と推定される。桁行は2.7m（9尺）等間である。

**SB509**（PLAN10）

建物の西南隅にあたり、東西・南北各一間を検出した。柱間はいずれも1.8m（6尺）である。

**SB510**（PLAN 9 ; PL.15・16）

桁行七間、梁行二間の南北棟掘立柱建物。東に片廂を持つ。柱間寸法は桁行は2.4m（8尺）等間。梁間3.0m（10尺）、廂の出は3.3m（11尺）。柱掘形は方形で一辺約1m。西側柱から西へいずれも12尺の位置に、柱筋をそろえて凝灰岩2ケ所、その抜き取り穴と思われるもの1ケ所を伴い、縁束の可能性を残す。西側柱列の柱掘形は、西隆寺創建時の整地土を

南北二面廂付き掘立柱建物と階隠

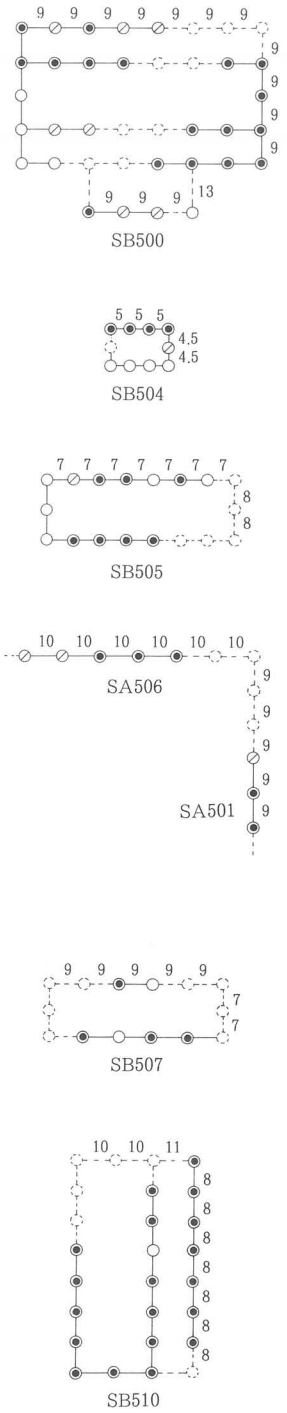



Fig. 26　ＳＢ500等模式図

西隆寺造営以前の掘立柱建物

除去した段階で検出されたので、西隆寺造営以前に位置づけられる。

**SB511**（PLAN６・９）

SB510に重複する南北棟掘立柱建物。梁間二間総長2.9ｍ、桁行二間総長2.9ｍで、柱掘形は小さい。SB510より古く、奈良時代以前の可能性がある。

SB511

**SA512**（PLAN９）

南北塀で、三間分を検出した。柱間は４～５尺で一定せず、柱穴も小規模である。SB511に重複し、より古い。

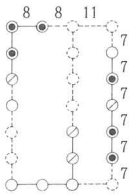
SA512

**SD513**（PLAN９）

東西溝。ごく浅く、幅は1.2ｍである。西端で南に折れ、浅い窪み状の溝SD514、SD516に連なる。

**SB515**（PLAN６・９）

桁行六間、東片廂付南北棟掘立柱建物。柱間は桁行2.06ｍ（７尺）等間、梁行2.4ｍ（８尺）二間、廂の出3.3ｍ（11尺）である。SE492を埋め立てた後に建てられており、また、SB490・495と重複し、SB495より二段階新しい。以上の点から、時期は西隆寺廃絶以降に位置づけられる。



SB515

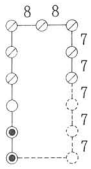
**SB517**（PLAN９）

掘立柱建物の東南隅と推定。比較的大きな柱掘形２つを確認した。柱間は９尺とみられる。SD510と掘形が重複し、より新しく、奈良時代後半に推定した。

SB517

**SB520**（PLAN９）

南北棟掘立柱建物。梁行二間柱間８尺、桁行五間以上、柱間７尺弱である。SB510・521と重複する。方位は後述するSA525と等しく、北で西に振れており、SG530と同様の傾きをもち、その影響が考えられる。これはSB495・505とも共通した傾向であり、それらと同時期に位置づけて矛盾はない。



SB520

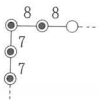
**SB521**（PLAN９）

礎石建物の北西部分。東西棟と推定され、梁間二間、柱間各2.1ｍ（７尺）、桁行三間以上、柱間1.65ｍ（5.5尺）等間である。礎石は残存していないが、掘形内に根石を多数留める。東方のSB490と北側柱筋を揃えており、同様に礎石建のSB490Bとの同時存在の可能性が高い。

SB521

**SB522**（PLAN９）

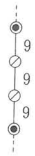
南北棟掘立柱建物の北西部分と推定され、梁間二間桁行二間以上。SB521と重複するが柱掘形の重複はない。SB490の場合と同様に、SB521はこのSB522を建て替えたものであり、本遺構はSB490Aと同時期に推定される。



SB522

**SA525**（PLAN９）

SG530の東岸にそう南北塀。北から三間分の柱間は2.7ｍ（９尺）等間である。以南にもいくつかの柱掘形があり、南に延びる可能性もある。



SA525

Fig. 27　S B 515
等模式図

## 223－21次

**SG530**（PLAN 9 ・11；PL.20）

SD529を利用して作られた池状の貯水施設。深さは１ｍ以上に及ぶ。幅は15ｍで両岸共に急勾配であり、人工的なものと考えられる。SA525、ないしはSB510との関係からみても、奈良時代前半まで存在したことは確実である。埋土から軒瓦・土器が出土しており、その年代からみて、西隆寺造営に際して埋め立てられたと推定される。

池状の貯水施設

**SX531**（PLAN11；PL.20）

平行する２列の杭列。地山まで達していないものもあり、層位から奈良時代前半に属する仮説の橋脚と推定した。

**SD532**（PLAN11）

素掘の蛇行溝で、東から流れてややカーブしつつ折れ曲がり北流する。東端で幅108㎝、深さ15㎝、北端で幅192㎝、深さ55㎝であり、その埋土には大量の土器・瓦を含む。

**SX533**（PLAN11；PL.20）

木樋

SA535の下層に検出された木樋。幅30㎝、長さ210㎝を留め、底板の厚さ５㎝、側板の厚さ３㎝である。木樋は北側の蛇行溝SD532と南側の土壙状遺構SX534をつなぐものと考えられるが、明瞭な流路は検出できなかった。このSX533は後述するSA535の西から３番目の柱掘形と重複しており、柱掘形は木樋の側板にそって掘り込まれている。したがって木樋の据え付けが先で、柱の据え付けが後である。しかし、木樋の側板を破壊せずに柱を掘り込んでいることからみると、SX533とSA535とは同時併存の時期があるだろう。また、柱掘形からは6663－Cb形式、その東隣の木樋掘形からは6710－A形式の軒平瓦が出土している。SX533とSA535の築造年代は、西隆寺創建期と考えられる。

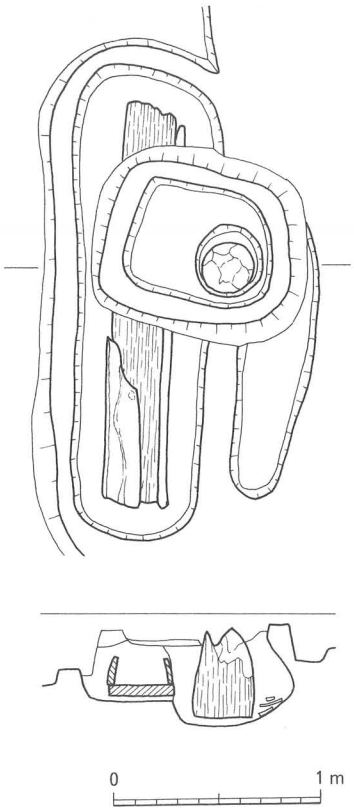


Fig. 28　SX533平面図・断面図

**SA535**（PLAN11；PL.20）

東西塀で、三間分を検出した。東は発掘区外に延び、西は、門SB540の北に想定される築地にとりつくと推定される。柱間は2.4ｍ（８尺）等間、柱掘形の一辺は60㎝～70㎝で、径28㎝の柱根を留めるものがある。掘形からⅢ期の軒瓦及び須恵器壺Ｌが出土。

**SB540**（PLAN11；PL.19）　棟門

掘立柱の一間門で、棟門であろう。柱間は3.0ｍ（10尺）、柱掘形は一辺１ｍの方形で、いずれも径25～28㎝の柱根を留める。底に石・瓦を敷いて礎盤とする。南北に築地塀を伴うものと推定される。

## 227次

**SA600**（PLAN４・８）

北面築地

西隆寺北面築地。築地本体、あるいは寄柱、築土用支柱などの痕跡は全く残されていないが、ほぼ直角に高まりを残した、秋篠川旧流路の侵食の状況、ならびに後述する門の柱礎石据え付け穴SX607の存在から、その位置を国土方眼座標Y＝－144.960.10を心とすると推定した。しかしこの南雨落溝と考えられる前述のSA429は、心々距離で約5.2ｍ南へ隔たることとなって、やや疑問を残す。なお、その北側の秋篠川旧流路跡SD431には、奈良時代の瓦片が大量に投棄された状況で出土しており、かなり早い段階でこの位置に流路が及んでいたことがうかがわれる。

**SX605**（PLAN４・８；PL.14）

SD429にかかる橋状の施設。SD429の岸なりに沿った四つの掘立柱穴からかなり、平面は整った四角形ではない。柱掘形は径60㎝前後の不整形である。西隆寺創建当初ではなく、かなり遅れた時期のものと考えられるが、この北正面の築地には門の遺構がなく、SD429と北面築地との間にやや空閑地をとっていたと推定される。

**SB608**（PLAN８）

北面築地に開く門

北面築地に開く門の礎石据付掘形と推定される土壙。調査区西端で検出されたため門の形式・規模は不明。一辺1.2ｍの略方形で、多数の根石を留める。

**SA610**（PLAN４・８；PL.14）

SA600の下層に重複する東西塀。SB608よりも古い。五間分を検出し、掘形は概して小さい。柱間寸法は2.1ｍ（７尺）を基本とするが、多少の出入りがある。奈良時代前半に位置付けられ、九坪北側の閉塞施設に比定される。東方は削平されているが、同じく奈良時代前半の、九坪東端の南北塀に比定されるSA425に連なる可能性があろう。

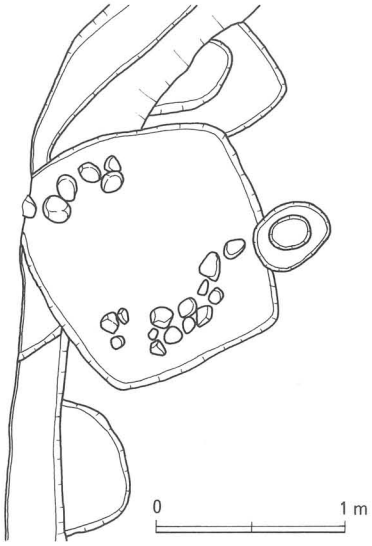



Fig. 29　SB608平面図